

牧野兵庫頭資料

牧野兵庫頭資料

は し が き

紀州徳川氏三百年のうち、名臣烈士少くはないが、牧野兵庫頭長虎ほど哀れにも悲劇的生涯をおくった人物は少い。しかもその罪を得た動機に至っては諸説ふんくとして、いまだその真相が判然としない。

私は彼の不幸なりし生涯に、限らない同情を禁じ得ないが、今はその真相究明の暇を持たぬ。即ち後日の研究資料として、目に觸れし諸書のうちから、彼に関する事のみを集めて一冊とした。

昭和三十四年六月十一日

清水 長一郎

牧野兵庫資料集目次

一、牧野兵庫父子節の哀史（西瀬 英一）	1
二、慶安異変の謎（全 人）	11
三、基藩士の幽囚（田辺町誌・雑賀 貞次郎）	14
四、右 " （田辺市誌・全 人）	14
五、王丸谷の邸址（日高郡誌・森 彦太郎）	15
六、由井正雪に関する別説（徳富 蘇峯）	15
七、徳川頼宣と正雪（全 人）	16
八、頼宣の名を利用（全 人）	17
九、正雪の遺言（全 人）	17
一〇、頼宣への疑問（全 人）	18
一一、松平信綱への誓紙（全 人）	19
一二、由井正雪の乱の概略（全 人）	20
1. その方策	20
2. その蜂起	20
3. 陰謀発覚	21
4. 処 刑	22
一三、風土記に見えたる藤野川村及三佐村（紀伊続風土記）	23
一四、長澤伴雄の兵庫寸言（南紀徳川氏）	26
一五、牧野長虎（右 " ）	26

一、牧野兵庫父子の哀史

講談の「慶安太平記」でいうと、南龍公の虎の印を盗んで、由井正雪の徳川幕府顛伏せの大陰謀の軍資金募集に利用した奸臣、南紀徳川史によると、何等由井正雪とは関係はないが、堀部佐左衛門と大阪の役に於ける武功問題で、老臣加納直恒と論争を大智寺で展じた揚句、六千石の大禄を弊履の如く投げ捨て、京都に脱藩し、南龍公の秘密を松平信綱に密告した逆臣。史談家の或者に云わしむれば、一世の野心児頼宣の陰謀の全責任を、一身に負うて捕われた忠心だろうという。紀州史談界の謎の傑物牧野兵庫頭長虎は、その功罪何れにせよ、私の好きな郷土偉人で、十数年前未だ田辺に住んでいた頃、よく中學校のお隣りの法輪寺の稱[？]壇の花咲く木かげの、彼の墓にお参りしたものである。

それから数年後、和歌山の雄禪書房の藏書中から、幕末の歌人長澤伴雄編の自筆本、「龍^{きみ}の御威稜」——主として頼宣の威徳や・その老臣の話やを、紀州の写本から蒐めたものを——借覧して、やゝ牧野兵庫頭の数奇に富んだ半生と、其の一族の悲惨極る最後を知って、一層同情を寄せるようになった。そして兵庫夫妻と、三男三太郎・四男藤丸・五男千代丸が日高郡^{すも}李村へ、長男新藏と・次男伝藏が同郡本川村に流配されたことがわかって、余暇あれば彼等不運な子供達の墓に、一輪の野菊でも手向けたいものとの所在を探った。李^{すも}は地圖を探して、川上村大字愛川字李で、「日高郡誌」にも

王丸谷の邸趾（川上村大字愛川）字李に王丸谷というあり。牧野王丸・秀丸・千代丸（由井正雪の余黨）三兄妹ここに居りしという。今も石碑を存す。また牧野千代丸の寄進せる念佛鐘は、愛川遍照寺本堂に藏せり。

と誌されていることから、千代丸が寄進の念佛鐘が、今も同寺に現存してをれば、どれだけ彼等の史蹟を立證する上によるこばしいかと、一日も早く李の里を訪ねたいものとあせったが果たされない。と三年前川上村の本紙販売店主栗本氏が、「當村に由井正雪の殘黨の墓があるから調べに来てほしい」と手紙があり、その約が漸く此の秋休暇に実現することになった。

私は紀南行脚の数日を川上村奥に割くべく、一日京都の画友広畠鋤花氏と・茶山本社御坊通信所主任に

送られて、ゆるやかな日高川の流れに沿うた縣道を、乗心地のよい南海バスで御坊を後にした。多年の宿望を果たすことが出来ると思う私の心は、秋晴れの空よりも爽やかである。日高川の郷土人傑三十木矢之助の墓碑を車窓に手向けて、川上村皆瀬の終点に着くと、栗本氏が出迎えて呉れていた。早速私達は村を見下す峠を一つ越へて、愛川の遍照寺に着いた。

眞言宗のさゝやかな山寺で、住職の岸本靜忍師夫妻は、お昼飯まで用意して待っていて呉れ、土地の郷土研究家である中島氏は、木にのぼって柿をもいで来てくれる。この村の人達に取っては、「慶安太平記」とどういふ因縁があるかということが、はつきりせぬらしい。岸本師に問はれるまゝ私は、極く荒つかみながら、数奇の牧野兵庫頭の半生を次のように物語った。

兵庫は越前福井の生まれで、童名を金弥というた。父の牧野主殿は秀康に仕へて三千石。金弥も平和に育てば父の家をつぐわけだが、十一歳の時同藩士の子息（十五）と口論のはて、ついに刃傷相手を刺殺して脱藩。當時兵卒の師が熊野本宮の社家だったので、その許にかくれた（恐らくこれは當時竹の坊をついでいた、名兵卒者楠不傳だったろう）。或年南龍公が本宮に詣でて金弥をみ、その聡明さと胆力、女にみまほしい麗姿が御意にかない、御小姓に召し出した（行列拝見の童中から見出されたというが、事實は不傳が公に頼んだのかも知れない）。「その時の一言、金弥立身の後も懇に被成候よしなり」と誌した本もある位。あの喧しやの国家老安藤直次老人さえ、この金弥の賢明さを愛したことだから、頼宣の寵愛のほどが窺われる。十七歳の時紀の川大洪水に功があつて、翌年一躍大番頭に出世、後には執政として六千石の大禄を貰い、頼宣の信望を一身にあつめた。若い藩主に駿河路からお供してきた、関ヶ原・大阪陣以来の家臣たち、いわゆる「横須賀衆」たちは、勿論これを快しとする筈がない。楠不傳の軍卒を伝へた正雪が、紀州に頼宣を訪ふこと数回、すでに險惡な空氣が紀藩の城下に醸されて来た。家康讓りの老臣や、三河九十騎の人達の紀州家ばかりでなく、徳川宗家の安泰を願つてやまぬ保守主義と、永年の浪々生活を頼宣によつて救われた恩義を、野心児頼宣の馬前に於て死を以て酬いん日の来たらんことを祈る、新規召抱えの家臣たちの戦国の夢なおさめやらぬ思想とが、何時かは衝突せずにすまされない。この二つの勢力の対立は、遂に慶安の風雲をはらんで爆発

した。

それは由井正雪が兵庫と親交のあった、渡辺若狹守直綱（この人も御小姓から出身）を頼み、紀州家仕官を頼宣も内諾していたのを、老臣加納五郎左右衛門直恒が断呼として反対し去ったのについて、大智寺に於ける堀部佐左衛門の武功問題で、兵庫と直恒の激論となり、遂に兵庫一族郎黨を従へ脱藩京都に隠れた。當時紀州の城下は暗雲に閉された形で、弓術家として知られた吉見喜左衛門経孝は、藩命により京都を探索、その妻女は針売に化けて、漸くにして兵庫はその妻の実家、堀川氏の邸宅に匿れていることを知り販藩を求めた。兵庫一族の籠が雄の山峠を越えて山口御殿に入った時、高田喜八郎が縁側に飛び上がって「御意なり」という。兵庫駕の中で平伏すると、流刑の旨を高らかに読みあげた。「御情なき御事に候」と云いながら兵庫は自刃せんと脇差を抜こうとしたが、関口矛心門下の竹本茂兵衛が得意の矛盾でさっと投げた。田宮流の居合上手で知られた兵庫は、倒れながらも脇指抜いて横に一閃、茂兵衛の鉄の脛當の骨三本切折ったのみで遂に捕えられた。時に慶安三庚寅十一月。腹心の得井太郎左衛門・同十三郎・同十郎兵衛は切腹。二代目村上彦右衛門・弟又八外九名が追放処分となった。正雪の大望破れ、駿府久能山に自刃したのはこれに先立つ事四月、同年七月廿六日のことである。もし南龍公にして正雪の陰謀を秘かに援助していたとすれば、正雪と同じ楠不傳門の牧野兵庫が、その間の連絡に努めたと考えられるのは當然で、不傳は楠氏末裔の勤皇家。兵庫の夫人が京師に生れ、慶安異変直前に京都に去ったこと、正雪は決して大山師などでは無かったこと、想像をたくましくすれば、慶安異変の謎はいよいよ深く、幕府や紀州家が事件の真相を抹殺し盡して居る以上、これを明らかにする何等文献が残されていないのである。兵庫父子が李に流配になった時、四男の藤丸はまだ数え年の三歳であつたらしい。従つて五男の千代丸はまだ生後間もない嬰兒だつたに違いない。

ここまで私が語った時、静忍師が本堂から千代丸寄進の念佛鐘を持って来てくれた。「京六条住、丹下播磨大祿貞的作」の銘があり、「享保十乙巳歳七月十七日」・「愛川村遍照寺奉掛 施主牧野千代丸 建方李辰右衛門孟包」と刻まれている。叮けば山狹に澄みとほるいゝ音色の鐘で、静忍師も「随分澤山な鐘を叮

いてみたけれど、こんないゝ音色の念佛鐘は」と自慢される。年表を繰ってみると、千代丸が七十七歳の時の寄進で、従って千代丸は永い生涯を、父の罪（？）故にこの山狭でさみしく過し、父や一族の菩提のために、この鐘を寄進したに違いない。では同じ施主の井原辰右衛門孟包とは何者だろう？。此の時李の場区長が私達を迎えに来て呉れたので、一行は千代丸の鬼藤丸の墓へまいるべく遍照寺を後にする。

雑草に埋れはてた牧野藤丸の墓石は李の小字小串にある。高さ八〇センチ御影石の粗末なもので、後代李の里人が建立したものだろう。「牧野藤丸之墓」裏面に「李講中」とあるばかりで、死歿の年代さへ刻んでいないらしい。私達は雑草を払ひ柿や野菊をたむけ、靜忍師は千代丸よりも更に悲慘な生涯をこの山狭におくった藤丸のために、ねんごろに経を誦して冥福を祈った。

牧野兵庫父子がこのわびしい山狭に幽閉されて、今年で既に二百八十四年と云う歳月が流れている。で、恐らく彼に関する口碑・伝説は滅びるにまかしている事だろうと、かねて思っていた通り李の里の人々の伝承は極めて薄く乏しい。中島さんが永くかかって採取した伝説はこうである。

牧野兵庫頭が正雪の陰謀に加はったことが露見したので、千代丸の乳母が藤丸・千代丸の二人を伴って、李の里の兄の井原辰右衛門の家へ逃げ皈ったが、この小串の里まで来た時、藤丸が持病の癩で苦しはじめ、折悪しく背後からせまった討手の藩士達に斬殺されてしまった。千代丸は乳母とともに大庄屋玉置弥助の家に匿はれて漸く一命を全うした。李の王丸谷には乳母や・千代丸の墓が残っている。――（主として物故した李住の大堀栄次郎翁の口伝による）――で、癩の苦を持つ人々は、今も藤丸の墓に祈願すると不思議に癩がなおる。

という。然しこの口碑はどこまで信ずべきか幾多の疑問がある。むしろ斬殺されたのは、李に流配後間もなく、妻子と生別して新宮藩や・田辺藩にあづけられ、慶安騒動二年後田辺で死歿した父兵庫を恋慕って、座敷牢を抜け出したであろう、三男三太郎少年ではなかったらうか？。（このことはなお研究されねばならぬ）。李の里では今はもう三人の哀れな兄弟の物語が一つに混同してしまつて、分析しがたいまでもつれている。

長澤伴雄の「龍の御稜威」に納められた、牧野藤丸の数奇な半生は、明和の人「抱嶺」の「牧笛類叢」

から抜書したもので、その大体を述べると、

四男藤丸は父兵庫の血をうけただけ性質逞しく、大男ですぐれた力量があり（兵庫は容貌いかにも柔和であったが、心根は飽くまで剛強、しかも強力で唐金の大火鉢を片手で持扱った）。常に牢番に向って云うのには、「汝等神妙に守衛すること無用也。われこの囚を破ることいと安し。その手並を見せん」と、格子に手をかけ揺すぶると、角物の格子がゆがみたわんだ。番人どもは大いに驚いて、いろいろ静めると、藤丸は「上の御咎めを受けたる身なれば何処へか行くべき、汝等氣遣うべからず」と笑った。然し牢番達の虐待には激怒して、二度までも破牢している。こうして三歳から陰惨な牢獄生活が続けること五十年、元禄十三年二月牢番奎兵衛なる者、余りにも藤丸を虐待（恐らく減食等であらう）したので、激怒した彼は奎兵衛が格子の中へ手を入れたのを捕えて引っこめき、格子を破って鬼神の如く一撃のもとに奎兵衛を殺害して、何処ともなく姿を消してしまった。

さあその注進が紀州藩に達した時城下は騒然、五十年前兵庫一族を日高川奥の山狭に流配し、哀れな幼時達まで牢獄に閉じこめて凱歌をあげた三河九十騎の生き残り達も、今は遊惰な元禄の夢からさめて、久しく人傳に聞く怪力無双の山猿が、いつ復讐鬼になって城下に現われるやもはかり難いと、戦慄なすところを知らぬ有様。まこともし五拾年間山狭の獄舎以外知ったことのない原始人にも似た憐れな藤丸が、憤怒の勢物すごく城下へ荒れこんだとしたら、アメリカのトリック映画キング・コング、ニューヨークに顯れたかの騒動になるわけだが、残念ながらさうした記録は残っていない。

何処をどう走ったか、五十年はじめて見る人間社会に驚きの目をみはりながら大津まで逃れた。或は幼き頃悲しき母や乳母に聞いた、亡き父の郷里越前福井に逃れようとしたのたも知れぬ。しかし運命は飽くまで無情で大津で遂に召捕らえられ、嚴重な籠に入れられて紀州へ連れ戻された。強力無双の彼のことだから、癪のような持病で苦しんでいた時捕えられたのかも知れぬ。そして切腹を命じられた。

そのころ藤丸を鬼神のごとく沙汰せしゆへ、切腹の場へ立合の役人いづれも覺悟して出たり。切先一寸ばかり残して觀世よりにて巻たる脇指を三宝にのせて出だせしに、持ちたるものふるうてガタガタと鳴りたるよし。介錯人には藤丸刃を取らんとする時、うつむくところを打つべしと兼ねて心得させ

おきたり。そのごとくすでに打んとする刃の光を藤丸チラと見て、「未だ早し」と怒ってそり返り睨みつけたる顔色に恐れて、彼者ふるひ出すゆえ満座の役人甚だ気づいたるが、存の外立派に介錯して首打おとしたる由。藤丸四歳の時囚に入れ切腹の時は五十四歳なりといへり。切腹の節諸役人への礼儀挨拶少しも悪びれず、その体幼少より山中に籠居せしとは思はれず惜しき事なりとぞ。

とは「牧笛類叢」の誌す痛々しくも雄々しい、父の名を恥かしめぬ藤丸の最後である。

「では、これから王丸谷を見ていたゞきませう」と云う射場区長の言葉に私は漸く我にかへって、藤丸の墓を辞し、靜忍師と別れて王丸谷へ向かった。

王丸谷の入口近くの射場区長の宅へ立寄って、冷いシトロンの御馳走になっていると、区長さんは牧野一族の遺物として、李の里井原勘次郎家に傳わっている、鈴と粗末な念珠二つと袈裟らしい布片れを、更に栗林信次郎家から三ッ柏の紋のついたお椀二つを借りて来てくれた。私は意外を遺品の残っている事に驚喜しながら手にとって見ると、鈴には藤の花と松と竹・鶴・亀など精巧な彫刻のある逸品で、玉を転ばすような音色がする。

射場

何でも昔は三人の子供が一つづつ所持していたのださうで、この鈴は藤丸さんの持っていたものだと言えられています。念珠も袈裟も藤丸さんのだと伝えられています。千代丸さんは念佛鐘を寄進した程だから、或は袈裟や念珠は千代丸さんのものではないでせうか。私は藤丸さんがあなたの云はれるような人だったのにひきかへ、千代丸さんは柔和な人で佛法に皈依して、一族の菩提を弔^{トモ}いながら、この山狭で半生を過したのではないかと思われてならないのです。……

中島

さう云えば、数年前齒科医をしている牧野順之助さんと云う人が、白浜温泉に来て偶然田辺に牧野兵庫頭のお墓のあるのを知ってお詣りしたと云う、新聞記事を見たことがありました。で、九度山の同氏に手紙を出し、川上村に牧野藤丸の墓があると知らせると、其の弟の実男さんから、「自分の家の祖先は牧野兵庫の頭で、其の子が高野山金剛頂院の俗弟子になり死を免れていたが、院主は名家の絶えることをしんで、慈尊院村の地士平田家の養子にならしめた。後平田姓を廃して牧野姓に改め、代々高野山の地士をつとめ現在に至ったものだという」、との返事が来ました。

或は千代丸さんが高野山に登ったのではありませんか。

記者

さあ遍照寺が眞言宗安養寺末だし、或は高野山の二つの寺院の古文書を調べさせて貰えば、そうした謎も釈然と解けるかも知れませんか。

栗本

このお椀の持主の栗林家の先祖は、王丸谷で奉公していたところ、「囚われの身であげるものもないが、このような椀で食事をせねばならぬ境涯に落ちぬよう、子孫への戒めのために取っておいてほしい」と呉れたのだと云ひます。

私達はわずかに残る牧野一族の形見の品々をカメラに納めて、三方屹立した嶮岨な山で囲まれた、唯一つ西側にのみ狭い入口を持つ王丸谷に入った。一度此の谷間に幽閉され、入口に監視小屋一つ設ければ幽閉者は袋の鼠。実に此の上もない自然の牢獄で、かうした場所を兵庫一族のために探し出した、男の惨忍冷酷さが偲ばれる。広さは約五反ばかり、兵庫の妻子を押こめた座敷牢や、豪刀な藤丸のために特に頑強に造られたであろう獄舎の跡は、すっかり水田になっているが、なほ荒涼極る谷底である。射場区長は腰の鎌で文なす雑草を刈り盡して呉れると、高さ九〇センチの苔むした墓石が一基現れた。藤丸の墓碑より遙に古いが、石質もよく「延宝八年十一月二十四日 賀宝輪慶信女靈位」の文字が判読される。俗名も刻まれていたらしいが、これは全然読み得ない。李の里では「乳母の墓」とよばれている。延宝八年といへば流罪三十一年後で、千代松・藤丸の壯年時代である。おそらくは流罪當時生れたばかりの嬰兒だった「否流罪後生み落とされたかも知れぬ」千代丸と、藤丸を憩しみ生存させて、一家と不俸を共にして果てた優しい乳母で、彼女は里人の伝える如く、李の井原家の娘だったかもしれぬ。さらに入口に近い崖の雑草を刈って貰うと、同じ様な石塔と六地藏が現れた。「天和二年三月二十七日董覺信女靈位」と判読される。この墓石は高さ七〇センチ立派な石塔で、これに並ぶ六体の地藏佛も、誰が刻んだか気品の高い石佛で、この地藏尊こそ兵庫と其の子の五人を形どったものではなからうか。勿論この墓こそ乳母に先立たれる事二年後、空しくなった兵庫頭の内室の墳墓であろうと思はれる。京都の寂光院境内に住んでいる鋤花画伯は、いつか並い覺えたらしくお経を誦し私達は黙祷し、この悲惨な山狭圀圍の人々の冥福を祈った。遺憾なのは遍照寺の過去帳を如何に繰っても、牧野一族の人々の戒名と・俗名を見出せぬことで、天

和二年と云えばちょうど千代丸が、乳兄弟とも考えられないでもない。井原孟包と遍照寺に念佛鐘を寄進した、丸四十年前のこと、あの念佛鐘は或は母親の四十回忌に両親や、薄幸な兄と乳母との菩提を弔うために寄進したのかも知れない。

こうして私は千代丸や三太郎の墓を見出し得ないものの、王丸谷の遺蹟は不完全ながら確め得た。では日高郡本川村に流された、長男新藏・次男伝藏の消息は？　しかしもう夕暮近かった。この日私と鋤花画伯とは、さらに五十五町山奥の都會の人達にまだ全く知られていない、山の湯神場を訪ねる予定だったので、慶安異変の謎と哀して、牧野一族の歴史を閉じこめている王丸谷に別を告げた。

「途中山の中で暗くなつては」と、栗本販売店主と射場区長が親切に同行してくれる。李から深い王丸谷を見下しながら、峠一つ越えて三十町上初湯川の里があつてここから廿五町、神場まではかなり峻しい坂路で、上り十八町は土地の人々が“九十九ヒチ”と呼んでいるほど曲りくねった急坂になっている。四圍の秋色は赤松が多いだけにたまらない。

記者　朝和歌山が大阪を早くたって、御坊から南海バスで終点皆瀬へ、それから遍照寺や藤丸の墓・王丸谷を訪ねて、牧野一族の冥福を祈って、其の夕は神場泊りと云う事になると、絶好のハイキングコースですね。

鋤花　畫題を求めているコースとしても、素晴らしいですね。

射場　翌日は神場から城ヶ森（一二六八米）を経て、護摩壇山（一三七〇米）にキャンプするか、寒川辻を経て竜神温泉に出るか、それとも神場から笠松に出て、上阿田木神社に参拝し、三十木矢之助が伐採した、矢之助杉の怪異な物語りのあとを偲んだりして、再び日高川に沿うて御坊に出て飯阪するか。どちらにしても村當局と相談して、これを機會に保勝や宣伝に、力瘤を入れてみたいと思います。

栗本　昔の神場は、常に五十名内外の湯治客を持っていたと云うのに、今では神場を訪ねる人の殆どは、自家発電施設を見學に行く位です。

さう聞けば冷たい夜風が汗ばんだ肌を渡る。峠から見下す遙かな神場の湯に、あか／＼と灯が見える。「紀

伊名所圖會」に加納諸平が、かう神場を描いている。

神場温泉

上初湯川の領で、字を神場という。在田郡より山路をへて此処に至る。此地上初湯川・猪谷という二溪の間に在りて、北は白馬の高嶺より山巒連絡として、環合四抱せる間に掌大の余地をトして浴室を構えたり。その始をとうに正徳年間愛川の遍照寺の僧、順栄（伊賀国名張の人）と云う者、始めて此地の岩間に硫黄の気あるを見て、汲みとりて湯として病者に浴せしめしに、功驗ありしかば遍く世に知らせんことを思ひて、薬師堂を建て草庵を結びて、男女の子を養ひてここに住ましめしより（神場氏の祖）、浴客年に倍し新に浴室を建てそえたりとぞ、その靈水は石罅より浸々としていさゝかつ湧き出づるを、篋を蛛手に架し桶にとり、浴客各自に温めて浴す。小瘡・痔・疫病等に最も効能ありという。

これで神場の描写は盡きている。そして諸平の筆に添えた、小野広隆の神場温泉の圖と「現代の神場は浴室の側に、発電所と小製材所があるだけで幕末と何等変わらない。上初湯にも李にもない、この湯の電灯は、大正六年にこの湯の若き経営者神場米一君が、令弟の高之助君を助手として獨力研究し、翌年県の認可を受け、溪流を利用自家発電を完成したもので、十六燭光で十五・六個点灯、晝はその電力は製材・精米等に利用されている。この天才児米一君は昭和六年三十三歳で歿し、令弟高之助君（三〇）が未亡人かめのさんを扶け、母堂まささん（七二）等と一家族八人暮しの山狭である。

その夜私達は藁葺の原始的な温槽に体を浸し、落葉の音をきゝながら「都会のハイキング客を迎えるようになれば湯槽も広くし、ぜひ此の温泉を電熱で温めたい」という。高之助君の抱負の実現する日の早からんことを、この山の湯の開拓者遍照寺二代目の住職順栄にいのつた。順栄は千代丸が遍照寺に念佛鐘を寄進した八年後、即ち享保十八年八月二十七日入寂している。もしこの順栄でも寺へ牧野一族に關した記録でも残していてくれたら、どれだけ當時の史実が釈然とするだろう。

山狭のいで湯の一夜が明けると、私達は神場君や栗本販売店主が「ぜひ城ヶ森附近にあるナベツル谷をみてほしい、すばらしいスキー場の候補地である」と奨めて呉れたが、私はまだ他へ行くべきところが多いので次の機會割受して、再び上初湯川李を経て南海バスで御坊へ、さらに牧野兵庫頭の眠る田辺法輪寺

へむかった。

田辺町の法輪寺の境内、すっかり葉の散った梅丹の巨樹のかげに、牧野牧野兵庫頭の墳墓を拾数年振りに訪ねたのは、もう扇ヶ浜の松の影斜陽に長い夕暮れだった。大小二基の石塔、その大きい方は、かつて南方熊楠先生や毛利柴庵老が、明かに「月霜院殿円空寂心大居士」の文字を読まれたさうであるが、今ではもう摩耗して判読しがたい。石塔の下に今も“土の団子”が供えられているのも痛ましい。これは田辺の人々が、「兵庫様は頭痛で亡くなられたのだから、頭痛で困っている人が願をかけ、お墓へ供えた水を頂いて販るとすぐ快癒する。お礼には土の団子を作っておそなへする」土俗を持っているからで、李の里の藤丸の墓に、瘠の祈願をこめる土俗と対比すると面白く、兵庫頭が藩の流罪人であるから、供物に本當の餅を供へる事を遠慮し、土の団子に代へたものであるうが、楠不傳の勤皇の思想を受けつぎ、藩祖の偉業を扶けんとした人と思はれる、隠れたる英傑兵庫頭に対して、あまりにも皮肉な供物である。お寺で過去帳を見せて貰ふと

月霜院殿丹空寂心大居士

承応元年壬辰十月十日牧野兵庫頭、慶安四年辛卯十月牧野兵庫殿、新宮へ御預田辺御通行、承応元年壬辰四月兵庫殿新宮より田辺へ御越、御與力衆晝夜の御番。和歌山より御目付衆の場源四郎殿・長澤安右衛門・阪本馬兵衛殿御越町屋に被居。同十一月兵庫殿御病氣に付、板阪慶意老田辺に参り同月十日御死去。法輪寺に葬る（役場記録より抄出）。

とある。此田辺藩の記録に従へば、兵庫頭は李の里に居ること一ケ年足らずで、妻子と生別して新宮藩へ・また田辺藩へ転々預けられ、痛い死を遂げたものである。では傍の小さな同時代の石塔は誰の墓か？この点も私にとって、兵庫の長男新藏・次男伝藏二人の流配された、日高郡本川村△△とともに未だ解きがたい謎の一つである。私達はお寺にわずから兵庫頭一族の回向料を包んで田辺を後にした。その夜東白浜温泉の「別天地」で、高野―龍神間ハイキングコースを漫画膝栗毛して来た、藤原せいけん画伯と落ち合う約束だったのである。波靜かな紀の松島を背景にした、新温泉旅館「別天地」の広間では、旅装をといた夫妻の外に、南海電鉄の十場旅客係・小川龍神バス社長・村尾別天地支配人・多田本社田辺通信部主任

が入江を照す秋の月に、灘の美酒に一盞すごしながら待っていてくれた。肴はその薄墓[？]一行が宿の快速艇を馳せて、絵のような畠島・神島を巡った飯途、東白浜の養魚場で釣り上げて来た、ハマチや・鯛や・伊勢エビなどを、宿の板場さん自慢の包丁で…… 夢田君は月を仰いで、入湯後の快さと微酔で陶然としている私に云う。

夢田 紀の海の南のはての空みれば

汐氣に曇る秋の夜の月

——秋成の名歌を川田順氏に教えられてもう何年になるか、實際実感のこむった歌だね

記者 大正十二年八月十五日精靈船や柱松のゆかしい行事の夜だったよ。川田さんがあれをわざと見物にこられたのだから——そして今宵の月も汐氣に曇っているね。

さう云へば、私が牧野兵庫頭の墓を法輪寺境内に見て、彼の数奇な半生に興味を抱いたのもその頃だった。

成憲 ホウ、この鈴のスケッチは？

鋤花 何でも兵庫頭が別れくになる子供達に、一つづつ分ち與えた鈴の一つで、藤丸が持っていたものらしいんです。西瀬君が写真じゃうまく写らぬから、スケッチしておいてくれと云うんで……

成憲 これは面白い。西瀬君残る四つの鈴のありかを知りたいね。——そしてその鈴を伝え伝えた鈴の

運命をさ——猿飛佐助の舌鈴探しを凌ぐ、大衆小説が出来るぜ。

鋤花 画伯の旅のスケッチを見ていた成憲画伯、私達の兵庫父子の物語に、いつの間にか兵庫黨になって、「いゝ鈴だ蒐めたいね、いい音色だったろう」を連発する。まこと「慶安太平記」の真相をつかむことは、この残る四つの牧野家の名鈴を探しもとめる程困難な、又興味深い研究ではあるまいか。

自昭和九年十一月十八日至十一月廿三日大阪毎日新聞連載 筆者は西瀬英一

二、慶安異変の謎

私達が本宮を訪れたのは熊野三山巡拝について、紀州で生物を研究する者が必ず一度は敬意を表する、贈從五位畔田翠山先生の墓に詣でたいためだったので、本宮警察署で所在を訪うと、居合した郷分會長・消防組頭榎本井一氏が、同墓の発見者宇惠普三翁（六〇）を訪^{さそ}って、竹ノ坊家菩提所に案内してくれる。「紫藤園攷證集」・「水族志」・「古名録」・「三千分圖」・「紀伊六郡志」・「熊野物産初志」・「吉野群山記」・その他遺著二百八十巻、幕末紀州が生んだ世界に誇る大博物学者の苔むした靈前に額づいて、一行は思はず、中多紀仁先生の銘「紀之國爲に、土肥之水清し、三神種を播し、鬱乎として岬々たり、靈禽異卉、黄柑黒鯨、洌に潜み野に執れ、海に育し山に生ず、天碩人を降し、研鑽息無し、圖録大に成り、後李是則る、績聖聞に達す、光榮何ぞ極らむ、茲に貞珉に勒し、以て厥の徳を鴻にす」を誦して翠山先生が、熊・猪・狼の跋扈する深山幽谷に多年採取に従事して、何等の危害にあはぬため、「天狗がついている」と恐れられ、良縁まで破約になった壯年時代から、安政六年六月十八日六十八歳の高令、なお本宮山中で採集中、急死されるまでの生涯を博物研究にさへげた偉績をしのび、僅か禄高二十石の此の医官に、生涯研究費を送って援助につとめた、幕末歌人安田長穂の友情と賢明を讃へた。

長穂は本宮の社家竹ノ坊に生れ、加納諸平・長沢伴雄とともに、本居大平門の三秀才と謳われ、紀州の長者雜賀屋長兵衛家の養子となり、宣長の「古事記伝」・諸平の「類題鯨玉集」の出版をはじめ、翠山先生の研究を援助し、當時のブルジョアとして富を最高に生かした先賢である。

翠山の墓に詣づとひる暑き 唐黍畠友とよぎりぬ

翠山の墓は苔むし花筒の 花も枯れたり繁木がもとに

ぬまを

長穂を生んだ竹の坊家は現代本宮小孝校の敷地になり、中世行幸趾として縣の史蹟指定を受けている。西行法師や加納諸平の詠まれた月の名所、七越の峯を熊野川をへだて、眺むる勝地である。

七越の峯はま近し藪ごしに見えて 秋めく月かゝりをり

ぬまを

記者が日ごろこの竹の坊家に興味を持っているのは、単に長穂の生家であるばかりでなく、この旧家を研

究すれば、或は紀州藩祖頼宣と由井正雪との秘密の扉が開かれそうな気がするからである。即ち「紀伊続風土記」にも、

慶長の頃、楠氏後に楠嘉兵衛良清というものの新宮宮堀内氏に属す。堀内氏滅亡の後、同族なるを以て竹ノ坊によりその家を継ぐ。後江戸に至り楠普傳と称し兵卒を教授す。

とある通り、正雪の師不傳は実に竹ノ坊に住していた兵卒者で、竹ノ坊家は當時紀藩主の宿坊だった。

南龍院様、熊野御参詣遊ばされ候せつ、御行列拝見に金弥御筋に罷在しを御覧ありしを召出され、御小姓仰附られ、御意に入つて召つかひ玉ひき

とは「牧野兵庫伝記」の一節であるが、後年頼宣の執政として禄高六千石、慶安異変の全責任を帯びて、配所に逝いた偉傑兵庫長虎こそ童名を金弥と呼び、当時「本宮の社家に師壇の好身あるに頼り」隠れていたのである。この師壇に好身ある社家こそ竹ノ坊の晋傳ではなかったらうか。

金弥は越前福井の生れで（父牧野主殿は秀康に仕へ禄高三千石）、十一歳の時同藩の息（十七）と争つて、刃傷相手を討留めて越前を立ちのいた。

頼宣の寵臣兵庫が、楠氏勤皇の血を受けた本宮の社家晋傳に教はり、正雪もまた晋傳門の秀才だったとすれば、そして正雪舉兵の事露はれ、駿府久能山で自刃するに際し

紀州頼宣卿の御名を借り、御扶持を蒙る由を披露するも、全く誰一人の扶持を受けず、天の照覧他無き者歟、申達の旨繁多なりといへども、時急の際これを申残す

と一書を遺したかと考えれば、更に當時兵庫が何を好んで紀州を脱藩、京都に潜んでいたかを疑へば、徳川幕府や紀州藩が抹殺した「慶安異変」の真相に一步近づきさうな予感をおぼえ、記者の探求心をそゝりたてた。

三、紀藩士の幽囚①

紀州藩頭要の職に在った士人で、政治的改革の犠牲となった者、若くは名譽に関する罪禍に關聯する者は、往々田辺藩に貶謫し幽囚された。初めは邸を構へて蟄居せしめ、後には出崎の圍（揚り屋といふ）に置いた。監禁は嚴であつたが、田辺藩では士人の礼を以て待遇した。

牧野長虎は慶安四年十一月罪を獲て新宮に拘囚され、翌承応元年五月に田辺に移され（五月八日田辺に來る）て神子浜に蟄居し、同年十月十日死去、同晦日法輪寺に葬る。長虎は兵庫頭にして南龍公の重臣たり。其の貶謫幽囚は由井正雪の事件に連坐すとも云う。

（以上「田辺町誌」一〇四頁 雜賀 貞次郎著）

四、紀州藩士の幽囚②

雜賀 貞次郎

紀州藩士で罪を得たものは、往々田辺にうつして幽囚された。初めは邸を構えて居らしめ、後に俗にいう圍い（揚り屋ともいう）を建て收容した。監視はきびしかつたが、士人の礼で待遇した。

牧野兵庫頭長虎は、慶安三年十一月罪をえて捕えられ翌四年新宮に送られ、承応元年五月田辺に移され同年十月十日病死。遺骸は同月晦日法輪寺に葬られた。長虎初めの名は金弥越前の人。人を斬つて熊野に来ていたが、紀伊藩祖頼宣熊野参拝途上に見て、反つて見出され望まれてその侍臣となり、小姓から累進して執政となり六千石兵庫頭となる。失脚については堀部佐左衛門（五百石）御供番をしりぞけようと、加納直恒に反対されたのを恥じ、藩を脱して京にのぼり、老中松平信綱に頼宣反逆の志あることを密告したるにあるというが、今は何ともわからない。しかし兵庫頭が捕えられるとともに、その子新蔵・

伝蔵・太郎・藤丸・千代丸らも、日高郡に配流されて押込めとなり、その黨得井太郎右衛門・同三十郎・同十郎兵衛三人は切腹、村上彦右衛門・同弟亦八は永の暇となっている。その処分のきびしさ・族滅の方針に出ているからみて、ナニか非常なことがあったらしい。兵庫頭は病死というが、仏諡の月霜院殿円空寂心居士といふ。月霜院の文字から見て、死を賜うたのばないかとも見られる。（以上 田辺市誌）

五、王丸谷の邸址

森 彦太郎

川上村大字愛川字李に王丸谷というあり。牧野王丸・秀丸・千代丸（由井正雪の余黨）三兄弟、此処に居りしといふ、今も石碑を存す。又牧野千代丸の寄進せる念佛鐘は、愛川遍照寺本堂に蔵せり。

（以上「日高郡誌」一五七七頁）

六、由井正雪に関する別説

徳富 蘇峯

由井正雪は幕府全盛時代における叛反人であつたから、幕府流の秘密主義にて、彼の出身に関する一切のことは殆んど湮滅し去つた。然して正雪彼自身も亦た其の便宜上、自己の生い立については更に語る所なかった。されば現今に伝うるものは、何れも當時に行われた街説・巷談の類に過ぎぬ。随つてその精確なる資料は得難い。彼の出身に就ては左の一説がある。

それによれば彼は慶長十五年、駿河府中宮ヶ崎に生れた。父は岡村弥右衛門と云い、農業の傍ら紺屋を営んだ。彼は四子中二男であつた。臨済寺に入つたが僧侶たるを悦ばず、去りて其の郷里の宮ヶ崎に住する浪人高松某に幸ひ、幼時より専ら「太平記」と「太閤記」とを受講し、ひそかに楠正成と豊

太閤を慕うた。十七歳の時江戸に出でて、其の親類である鶴屋次右衛門といふ、春日局の御用達なる菓子屋を便り奉公口を求めたが、彼が廿一歳の秋主人弥次右衛門病死したから、親類共の謀ひにて鶴屋の家督を相続せしめた。然も彼は商業を好まず専ら武士浪人と交際し、或は商用に託して四方に周遊する等しければ、遂に離縁の相談が持上った。

○當時牛込に上杉家の浪人楠不伝といふ者があり、楠氏の末裔と称して菊水の旗や正成の短刀及び楠氏の系圖を所持した。正雪は彼の門に入り厚く彼を奉じたから、頗る彼の信用を得た。されば彼は離縁談判を幸として去りて、楠不伝の娘と結婚し其の一切の物を相続するに至った。此より彼は自ら楠氏を冒し、公然軍法の師範として世に立つに至った。尚ほ彼が楠不伝より譲られたる軍書は、「兵道集」十七卷・「軍要集」十三卷であつた。かれは自ら「献捷録」や「和漢軍理」^{ワカンジュンリ}遍述し、正保年中には「平家物語評判」二十七卷を作った。此の書は絶版となつたから、今日世に伝ふる同名の書は、彼の著と同じからずといふ説もある。

○彼が紀州徳川家に出入りしたのは隠れもなき事実だが、當時の名大名備前の池田新太郎少将光政も亦彼に傾倒し、五千石を以て抱えとしたが、正雪は其の禄の少きを以て之を辭し、熊沢も亦彼に反骨あり御家の妨げとなるべしとて、之を遮り止めたとの説がある。何れにしても彼の身邊は小説的濃霧の裡に蔽はれつゝあれば、其の確説は殆んど得難い。

七、徳川頼宣と正雪

特に紀州頼宣は家康晩年の愛子にして、三家の一なる顕要をしめ、頻りに天下の浪人を懐柔し、諸大名の臣家中にも名ある者共には、それぐ渡りをつけていたと云えば、幕閣が彼を疑うたのも必ずしも其の理由なしではなかつた。

頼宣に果して野心がなかったかは誰も知る者はない。例ひ此ありとしても若し頼宣が天下をとらんとするに於ては、所謂大名は決して之を容さなかったであらう。そは加州公前田利常が、自分の居る間は決して左様の事はさせぬ。薩摩でも仙台でも固より自分と同様の了見であろうと云うた言に徴しても知るべしだ。此の如く大名相互の均衡牽制は頼宣の野心——假りに之ありとするも——をして遅くする能はざらしめたであらう。そはとも角も頼宣は當時に於ける第一の注意人物であつた。

八、紀州頼宣の名を利用

豫て野望を蓄えたる正雪は、家光去りて家綱の世となり、所謂主幼臣疑人臣動揺の時期を見、弥よその決行に着手した。而して彼は天武天皇の弘文天皇に於ける如く、永樂帝・建文帝に於ける如く、紀州頼宣の名を藉りて大事を遂げんとした。斯る場合に叔父が弱姪の位を奪うのは古今有り勝の事だ。而して頼宣は実に家綱に取りては大叔父だ。正雪が彼の名を利用したのは、決して理由なしではない。

九、正雪の遺言

尚ほ謂所る正雪の書置きなるものは、左の通りである。

此度讒奸有之レ私致ニ叛逆一之様に被レ入ニ聞召一無ニ是非一仕合ハ尤斯レ可レ有レ之儀と存候。然共
天下之制法無道にして、上下困窮仕事心有者誰か不レ悲レ之哉然に松平能登守
爲レ諫雖レ致ニ遁世一還而狂人と執成忠義之志空罷成候事是天下之大なる嘆。上様御爲
不宣儀存候

私わたくし不ふ肖しょうに御座候得共ござそうろうえども 天下令てんかをししてこんきゆうせしめるところの 困窮こんきゆう一一所之讚岐守しよのさんぎしう（酒井忠勝）等おんるせしめるてめ 爲令をんるせしめるてめニ遠流えんりゅう一一 少々
偽謀いつわりはかりてにんずをよおしニ催ふせ人数にんず一一暫令しばらくろうじようせしめばニ籠城このむね一一 此旨段々天下御長久之政まつりごとあがりもうし 舉あがり 申まう 其上そのうへにて如何様共可まかりなるべくニ罷成ひたす一
と相謀候得共ふしよつのごうざし 不肖之志ふしょうのこころざし 徒いたずらに罷成候
紀伊大納言様之御名を借不かりもさずレ申候得ば、人数之かたらひ難いレ成候故、偽いつわりてごふちをこうむり而豪もうしたつすることあまたニ御扶持ごう扶持一候者そうろうものと申候。
私儀誰人よりも扶持申請候者に而無ふちもうしうけレ之候。心底、天之照覧、此外無ふたレ他候、申達事数多御座候へ共、
時急早々申残候以上

御奉行所

由井 正雪

惟ただうに此は稍や正雪の本音に庶幾ちかききものであらう。彼は自ら將軍とならんとの大望はなかった。又徳川幕府を倒して、京都の政治となさんとするの大志もなかった。彼は只だ將軍をさしはさんで狭さんで、天下に政を爲さんとの野心のみであった。所謂に「私体如何んぞ、四代之天下令をしてらんばせしむることニ乱破らんぱ事可さレ叶儀えひぎに無なレ之候とは、全く飾辞とんじでも遁辞とんじでもなかったようだ。徳川の天下はそれ程基礎が鞏固こうこになつて来た。

十、頼宣への疑問

但だ問題は紀州大納言頼宣であった。さなきだに頼宣は其の英武にして、然も家康の愛子であつたと云ふことにて、幕閣の注意人物であつた。然るに正雪は彼を背景とし、彼の名によりて徒黨を糾合した。彼自身も紀州大納言の家来と称した。固より彼の遺書には斯くせねば人を集むること能はざるか為に、頼宣の名を假りたるものにして、實際は何等の關係なき事を明にし、然も幕閣は彼の遺言によりて安心すべきではなかった。此れに就て幕閣は頼宣に向つて、花押もしくは印判を示して釋明を求めた。

或は松平信綱紀邸に赴いたと云い、又は酒井忠勝がしかしたとも云う。然して「紀州祖君言行録」には

千代田城に召喚したが、頼宣は除うにこれを見て、寔に御家の爲慶賀に堪えぬ。若し之が外様諸大名の名を籍ることでもあらば、安心なり難いが御家の血脈たる其が、名を假るに至りては、弥よ御家万歳の徴候だと云うたとある。これは果たして其通りであつたか否かは保証の限りでないが、然も斯る釈明にて幕閣は容易に安心しなかつた事は分明である。

そは慶安四年より万治二年まで、殆んど十年間販国を許されなかつたことで知るべしだ。此れは將軍幼少であつたから、先代の遺命にて補佐の爲めと称したが、其の実は注意人物であつたから、之を体よく江戸に留置したのであらう。

大猷院殿 御他界の砌、頼宣君熊野牛王の裏に起請文を御書き、御血判なされ黒塗の箱に収め、日光御宝殿にひそかに納められ、當公方様へ対し奉り、未來までも不忠不義なさるまじくとの御文言なり。是を誰も知る者なし。万治二年の春の頃日光社僧中、松平伊豆守信綱にふと物語ありしかば上聞に達し、御老中相談にて日光より江戸に取出し被見あり。公方様へ対し不忠不義仕るまじくとの、御誓約ひ申候て氣遣仕候。古今無類の御忠節にて候と感じ奉り。其年在江戸十年目に御販国の御暇を進ぜられけるなり（難龍公言行録）。

果して此の通りであつたか否乎は知るべからざるが、然も如何に彼が幕閣の注意人物であつたか、此にて知るべしである。

十一、松平信綱頼宣の誓詞を徴す

正雪駿河國にぞ旅行して、荷札に紀伊大納言の家来のように見せかけるとかや。然れども自害しければ、如何なる事と知る人もなかりしに謀書にこそ有けめ。紀伊頼宣卿の御判形とて、既に被露に及しとかや。

是を大納言家へ直にこそ照合すべけれとて信綱公行玉ひける。さて垂相の御判形の一通を取出し、眞偽を御直に糺し奉らんが爲に持参申たり。世にいたずら者ありて此如に謀書して、御難題をかけんとはかりたるが、其御判形御覧あるべしと御膝本へするく差寄たる御勢ひ、眞の忠烈顯れにければ、頼宣卿を始め奉り御家司詰合せたる人々俄然と驚き玉ひける。然れども其氣色正しく御存知なき御様子と見て、殊に信綱公面を和げ玉ひて、此書は謀書にこそあらんづれ、かゝる所平日の御墨色とは大きに違い侍るなり。かような反故は焼捨べきものとて即坐に引破り、只判形などは御身近く召仕るゝ人々にも、御油断なきこと肝要にこそと挨拶ながら申させ玉へば、頼宣卿の仰に此判形の書いさゝかも覺悟なし、然れども判形ある上は貴殿案の如く、近習の者共向後は油断成りがたしと、御扈從中の詰て居る辺を見やり玉ひけるに、加納某とや云若輩成人御縁へ立よと見へしが、御目通に切腹してぞ失にける。実は此の人の知りたるにはあらざれども、主君の御難義を一身に蒙り、誤りたる体に見せ申しける。さて信綱公は仰せらるゝは、此の上靜謐のため其家も無_ニ別條_一の爲、かたがた御異心なき御誓詞あそばされべしと、義氣をあらわし述玉へば、さすがの頼宣卿にて尤とて則誓詞なされけるとなり。夫れを請取せ玉ひ御販りゆへ、自世の風説も忽しづまりけるとなり。是智勇なくばいかでかくあらんやと、世舉て是を感じあへりと。一説に酒井空印をなし玉ふともいへり（事語繼志録）。

十二、由井正雪の乱の概略

(1) 其の方策

丸橋忠弥等を江戸に留め、加藤市郎右衛門等を京都に、金井半兵衛等を大阪に向はしめ、正雪自身は駿河久能山にありて、自ら東西各方面の指揮に當る。

(2) 其の蜂起の方策

江戸では以前より貯藏せる火薬を府内要所に配置し、仲間の一人小石川鉛硝藏奉行河原勘右衛門をして、夜に乘じ煙硝藏に放火せしめ、三万駄の煙硝が一時に爆発すると同時に各所に放火市中を火海とし、その乱に乘じ丸橋忠弥は志士をひきい、葵の御紋付けたる提灯を高く掲げ城内に乱入、大火に付御徒士頭初鹿野伝右衛門、御徒士を引連れ罷出づ。將軍様には速に紅葉山へ御立退あるべしと大呼し、將軍の輿を出し扈從を屠り將軍を奪い、間道より久能に直行する。一方櫻井三太夫・同彦兵衛は別に老人の決死隊——老人は討死にせよ。然らば其の子孫は本身に取立つべしと約束があった。——御老中其の他重役の登場の道に殺害する事。佐原重兵衛・長山兵右衛門等は道觀山に抛り、諸大名の定紋を付たる提灯を持って八方に走り、御譜代大名の屋敷に火薬を投じ乱入し、柴原又左衛門は鉄砲三百挺を持ち、忠弥が將軍を奪うて久能に奔る時追撃の兵を食いとめる。

○京都では加藤市郎右衛門は吉田初右衛門と共に、江戸の吉報を受けるや、略ぼ同様手段で二條城を乗取るべく

○大阪では金井半兵衛を主將とし、石橋源右衛門を副將とし正雪の報を受けるや、市中を焼討し諸大名藏屋敷の米穀を奪い大阪城を抛守する。

○久能山は東西の要地で家康埋骨の地であり、久能社領の農民はかねて正雪の恩徳に懷いたもの故、正雪自ら此の山を本拠とし、久能山金庫の金銀を軍用資金とし、府中の城を取り將軍を擁して四方に号令する。

○此の叛逆の加盟者は侍大将十組・人数約五千人と云う。果たして其れ程の人数ありしか断言し難いが、何れにしても少からざる人数に相違ない。

(3) 陰謀の発覚

○正雪は以上の手筈を整え、慶安四年七月廿一日江戸を出発。同行は弟由井三左衛門・熊谷六郎左衛門・鵜野九郎右衛門・同清兵衛・同七郎右衛門・増上寺所化廓然寺なり。二十四日駿府着、茶屋町梅屋太郎右衛門方に投宿、廿九日東西一齊に舉兵の予定。

○然るに七月廿三日老中松平伊豆守信綱の臣奥村權之丞が信綱に打明けた。即ち權之丞の弟奥村八郎右衛門

は、正雪の後を追ひ駿府に赴かんとし、廿二日兄權之丞に急に或る大名に抱えられ出立するとて、別れを告げたるも兄の怪しむ処となり、遂に其の陰謀の一端を語る。兄大いに驚き自訴の上恩賞に預れと説諭、伊豆守に訴う

○同時に林理右衛門・田代又右衛門・同次郎右衛門も変心して老中に密告

○弓師藤四郎も町奉行石谷左近將官貞清の邸に至り、両奉行に一大事を直訴すと申出たにより、石谷は同僚神尾備前守元勝を招き之を聞いた。

○依つて老中は町奉行に命じ、七月廿三日夜丑の中刻（廿四日午前二時）弓師藤四郎を案内人とし、灯火をつけず暗に乗じて丸橋忠弥邸・神田御茶の水上、吉祥寺門前幕府中間頭大岡源左衛門屋敷を囲み火事と呼び、忠弥丸腰にて戸を開ける処を捕らえ母・妻子まで縛す。

転じて小石川の鉛硝藏の河原勘左衛門（或は十郎兵衛とも云う）の一家擧げて捕う。亦品川・千住の出入口を鎖し通行人を吟味し、御使番駒井右京親直を急使として駿府に赴かず。

○慶安四年七月廿五日未^{ひつ}の下刻（午後二時頃）駒井は駿府城内大久保玄番頭邸に着、御常番・加番・町奉行・その他諸役人を招集、その中宿主より正雪投宿の事届出あり、廿五日夜正雪の宿を襲う。正雪遂に自害す。

(4) 処刑

九月十八日正雪以下の死骸、及び父母・妻子・兄弟併せて十八人を安倍川西河原に磔^{ハリツケ}又は斬罪に処す。亦同志熊谷三郎兵衛は江戸に潜居するも、七月廿六日夜芝の土取場（今の切り通し）にて自殺。金井半兵衛・吉田初右衛門は大阪に在りしが、金井は八月十三日天王寺にて自殺。吉田は変装して有馬温泉に潜伏中、大阪奉行所に探知され、捕手と斗ひ與力戸沢太左衛門に殺さる。或は吉田でなく半兵衛の従弟金井善兵衛とも云い、善兵衛二尺七寸の助定の刀を揮ひ三人の同心を切り、遂に戸沢太左衛門の槍に倒るとも云うも確には不明也。

参考文献 「龍之稜威」長沢伴雄自筆稿本 和歌浦東照宮藏
「牧笛類叢」 県立和歌山圖書館藏

と 昭和七年十一月一日発行の「紀伊郷土誌料圖書展観目録」和歌山圖書館発行に見ゆ

十三、藤野川村及び三佐村

(1) 藤野川村（登宇乃賀波）

田畑高 七十九石三斗七合

家数 十五軒

人数 八十七人

伊藤川村の丑の方十八町にあり、山巒環合して谷口甚狭く其形囊の中に入るが如し。村名の義詳ならず。土人は登納賀波といふ。或は殿川と書す。村の奥老屋・佐井に越ゆる峯を殿越といふ。古此谷に貴人の落人となりて来り、住しを里民尊ひて殿を以てこれと呼しより、殿川・殿越などの称起りしならん。

○小祠二社

妙見社 社地周二町二十間
村の北谷の内にあり

不動社 社地周一町四十間
村中にあり

○囹圄一箇所

村の奥山谷の中にあり、藩士罰ありて追放に処しかたき故あるもの此所に幽囚す。此地山峯環合して峯を越ゆるに非されば他に出へからず。唯三百瀬へ出る一路谷口開くといへども、溪深く峯そびえて山腹に纔に糸の如き一路を通ず。因りて幽囚の者を置く地とせらるるといふ。

（以上 紀伊続風土記）

(2) 三佐村（美左）

田畑高 百九十七石六斗四升九合

家数 四十三軒

人数 百七十六人

老星村の良十四町にあり、慶長検地帳に箕佐と書す其の義詳ならず。村の南三町谷にあるを小字本川という。
（以上 紀伊続風土記）

三佐村安樂寺所藏 牧野一族寄進の鉦

松壽院清巖固白居士逆修

施主 牧野直能

紀州日高郡御座村安樂寺 愍譽

代正徳三癸巳五月十八日

清譽淨念信士 施主 竹野甚兵衛

宝暦六丙子三月

行譽代 江戸西村和泉守作

の銘あり。

（川中村郷土資料）

○一、兵庫頭伝記に長男新藏・二男伝藏は日高郡本川村へ流罪。三男太郎・藤丸・千代丸八同郡李村へ流罪せられたり。藤丸元禄十二年卯二月圍を破、番人李兵衛と云者を殺して大津まで立退けるを召捕、同三月朔日切腹被仰たり。檢死小笠原庄太夫なりと云々。
（以上 南紀徳川史）

参考

○山向寺

川中村大字坂ノ川 由緒不詳

台譽円華（正徳四（一七一四）年八月七日歿）を、假の初代とし、深譽長順（明治廿九年歿）を中興とす。

○極樂寺 川中村大字佐井 正徳二年十一月四日厭譽欣秀の開基と云ふ。
○安樂寺 川中村大字三佐

(以上 日高郡誌)

○佐井村 家数四十八軒 寺一軒 淨土 極樂寺 但九品寺末寺
○坂ノ川村 家数四十一軒 寺一軒 淨土 山向寺 右
○味佐村 家数四十五軒 寺一軒 淨土 安樂寺 右
○小釜本村 家数五十二軒 寺二軒 寺二軒 淨土 遍照寺 右

壱軒眞言般若寺 高野山知善寺末是は長子八幡神宮寺

(以上 日高鑑(一六七三年))

○八幡神社 川中村大字小釜本

勸請の由来詳ならず。田尻の名門龍田氏累世(其の祖八郎足利氏の初世此地に来る)社務を主管し、高尾氏副司として諸神事を攝すという。龍田家旧記に「長子八幡宮は和佐村より越方村まで都て氏子也。其頃天正まで第一の大社たり鎮座甚だ古し。源平戦の時義経の臣弁慶勝利を祈るの願文を當社に寄せ、自ら般若心經を書写し是を奉納す。天正の末盜賊宮殿に入り伝来の宝物を盗み、件の願書・宝物等も此の時に失せたり。後に聞けば彼の願書・其餘神宝の類は、有田郡広八幡宮に納りありと也。永禄の末足利氏未だ亡びざる迄は、小釜本村・老星村の中に社領ありし也。この二ヶ村の名八幡宮社領の因縁により名づく。老母子は逢母子と書し、小釜本を釜元と書す。皆御湯を捧げたる等古説の残れる也。古説に三佐村も昔は御座と書く、これも八幡宮縁起に載せたり。坂の川に八幡平あり」。義経の臣弁慶の祈願云々は疑はしけれど、此の社の古きことは想像するに堪ふ。中畧——風土記に社の後に樟の大樹あり、祀りて山神と云う。神主柳瀬氏あり——近年社殿改築の結果、左の老樟は社殿の前面に現るゝに至れり (日高郡誌)

○長子の開拓

湯川直春の臣小山池之進湯川丸山城落城の時(慶長三年戊戌二月十四日(一五九八))行之進討死す七十八才。其の時子供三人が越方に来て、其の後長子に今の小山家に分家して長子を開拓す。 (川中村郷土史料)

十四、長沢伴雄の兵庫寸言

○長沢伴雄云 兵庫頭面相いかにも柔和にて心根飽迄剛強也。強力にて唐銅の大火鉢を片手にて持扱ひたるとぞ。又昼夜軍幸に精心をこらし、其此は関ヶ原・大阪軍杯に場数軍功^武の有志未だ残りありけるを、毎夜招待して、戦場得央の評論などに心を盡されたりとぞ。慶安二庚寅年十一月田辺へ流罪被仰付、安藤家へ御預に相成、承應元年辰十月十日配所にて死去す。

○彦右衛門通重 義満総領
初才藏

元和八戌年部屋住にて被召出知行五百石被下。寛永十五寅年八月父彦右衛門爲跡目四千二百廿石無相違被下慶安四卯年十二月日不知御暇被下右ハ牧野兵庫一件に不御暇被下候旨申伝候 明暦二申年四月六日豫州病死

按スルニ通重御咎ハ牧野兵庫ニ與シタルニ非ス 唯堀部左右衛門力書類ヲ奪シタル不來有リシ事ノ儀 牧野兵庫ガ伝ニ詳ナリ

十五、牧野長虎兵庫頭

牧野長虎 初称金弥 父曰主殿 越前人 仕秀康公 食禄三千石 長虎十一歳 與其友違言 斬之而逃去 寓於熊野祝史家 一日公詣熊野社 長虎拝齒簿於道傍 公美而奇之 舉爲近侍久之益被寵 嘗從公於江戸 公偶臥病 長虎侍養具至 目下接腫者四旬 衆皆異之 一年紀伊川大溢 長虎自請防之被充 乃急遽馳至 壞屋伐木以防之 長虎時十七 公愛其遇事剛果 其明年擢爲大番頭 長虎自喜 以爲武士之榮 後累拔擢爲執政食禄六千石

長虎嘗從公於安藤直治家 公嘗聞直治有一愛少年 宴酣命出侍 直治不奉命 公強不聽 公有不平色 左

右皆懼獨長虎進曰 公何不憚 飛彈之不奉命 不足咎也請陳其故 若明日幕府 臨公邸 命使臣出侍 公必不聽也 然則飛彈之方寸 非武士所欽慕乎 臣深有感也 直起舉直治杯飲之 於是公意解 滿坐生色 再聲歡而罷

公嘗獵伊勢傷足 使遠藤正次兵右衛門 遽召竹田慶安於國都 正次以長虎有恩寵 先過長虎密報之而後造竹田氏

長虎聞之 即一騎馳赴 從者從後追至 既而正次與慶安共抵橋本駅 駅吏要於道曰 今牧野氏獨騎馳焉 從者追至 使僕報公等曰 宣速至焉 正次大驚 叱咤追求 謂曰 予迎慶安突出內旨 不可使他人知 特以君有恩寵私告之 若君先予 而至予將獲罪矣 長虎然之 乃使二人先行 而從其後至 長虎常鞍馬以備緩急

長谷川勘八弟曰勘助 頗有才幹 欲別開家 久而不舉 嘖怨出亡 公特命還之 使勘八守之其家 亦不舉 勘助益無聊 既而勘八 聞官將処勘助法乃使出亡 公聞之怒曰 勘八失所守者 是亦宣処法 勘八固分受法 俟命於家 親戚故旧會議救之 不決 乃相共謀之長虎 長虎曰 公裁失宣 予爲辨之 其夜登城請謁 時公既就寢 命俟明日 長虎曰事急 不可過今夕 公乃出見 長虎曰 聞將処勘八法 臣請公裁失當 公不憚曰 失所守者 處其罪不亦可乎 長虎曰 若公意何不命隊長守之乎 今使兄守弟 以情考之 是教之使士 豈不可惜哉 於是公釈然意解 速命勘八出仕如常 初長虎 見 公而論之 公色甚厲 長虎無毫所憚 人畏其抗直

中川數右衛門教授砲術 嘗使其二弟子 同仕高取候 甲某循良善誘人 乙某そ率失人心受業者 皆皈甲某 乙某不平 屢譏之其師 師信之而怒 使人口所嘗授法書以絶之 甲某不服 其人乃還報 師不聽 使再往收之 甲某益不服 其人病之 欲刺而殺之 却爲所殺於是高取候 使人來報中川氏 使者狂而口カ(望)死 旦曰事起於狂 請使爲敵者不償死 時公在江戶 三浦爲時 及長虎留守 長虎聞之怒曰 是決不可聽 夫狂與不狂姑置焉 爲我紀人之敵者 安得無故而宵之 其言又甚慢甲某之首 必可速斬而致 不然予將自往取之 高取候 不得已 斬其首致之

長虎 妬堀部佐左衛門功 欲擯斥之 爲加納直恒所排擊 深慙憤之 必欲擯斥堀部以遂其志 不

成遂亡命上京師匿於堀川氏 公使吉見經孝^{喜左衛門} 踪而獲之 長虎之亡 欲擾國乘其變以其志 於是密報松平
信綱 以公有異心 信綱怪密報之公 公驚與諸老臣議 光貞公進曰 命屠腹而已 公曰宰相斷充當 唯後
患難測 暫宥其死 以俟他日耳 乃誑誘召還之 配於田辺而死
長虎有五子 長曰新藏 次傳藏 次太郎 次藤丸 次千代丸 皆被配 藤丸性剛強長大 有膂肉其被配
甫三歲嘗謂守者曰 汝等勿用嚴衛 予欲破之易々耳 試使視予伎倆 因執其閑木振之 劈歷有聲 守者大
懼 百方慰之藤丸笑曰 予既得罪被配 豈敢逃去哉 汝等勿以爲意 嘗怒守者無礼 破閑木出 搏殺守者
逃近江大津 終爲所捕獲 吏卒皆畏藤丸 其就刑股栗而立 死時五十四 在獄中凡五十一年 其言語動
作皆得機宣 絕不似生長獄中者云
(以上 牧野伝記)

按スルニ 牧野兵庫頭召捕ハ慶安三年十一月ニシテ
龍祖同年ノ譜ニ詳ナリ

十六、牧野兵庫頭之事

南龍院様御取立ありし牧野兵庫頭長虎、出者猿樂役者の子と云。又公家出とも云説あり。其实を能尋るに
越前の素姓にて、同国藤島の一向宗長命寺の児姓を勤めし者也。子細有て十五才の時紀州熊野新宮の社人
方に寓居して有けるが、或時頼宣卿御放鷹の節社人方へ立寄せ玉ふ時、^{兵庫頭事}金弥^{幼名}が容色勝れたるを
御覧あり被召出、始めは禿童に召使はる。才智勝れて伶俐なるに依て日々出勤し、程なく御祕藏ありて御
小姓となりて、昼夜御側を去らず。渥美太郎兵衛友元御預りて、劔術は村田左馬介^{元柳生但馬守内第二代目}
^{が弟子に被仰付三・四月}

程之内但馬守を取立し仁始め彌惣卿
柳生但馬守宗冬厄介寛永六年四千石 被召出御家士の内にも並ふ程の器用也。

頼宣卿在江戸の節御不豫の事ありしに、四十日程昼夜一睡もせず相勤めけるを以て益々御意に叶ひ、御加恩日を追て重く諸士是が爲に手を拱く。或時和歌山紀の川下八幡堤洪水にて切れたる時、牧野金弥十七歳也。是を築留可事由を願ふに依て早速に被仰付、急に彼地に至り在家を壊ち木を伐て難なく大河を築留たり。公其大氣なる事を御感ありて、十八歳の時に大番頭となる。渠も若輩の者に大番頭被仰付被仰儀、武士の名聞難有存候迎御辞退も不申上。金弥器量あるものと御褒美有りて、若輩の頭なれば迎十二組の内より手に覺ある者を撰びて金弥に御預、威勢日々に盛んにして程なく御家老となり、六千石賜り兵庫頭と受領し、平生君命の事に於ては一毫も私せず、我身にかゝる程の事なれば迎、何事にも溜る事にては是なき生質也。此兵庫頭紀州を立退ける子細堀部佐左衛門軍場の論より起る。其大概は堀部佐左衛門

大御番後
御供番

御家士の肝煎にて五百石御供番相勤なり。御館にて御供番と云うハ、江戸詰の時は道中母衣串を持する事也。是ハ母衣かけて小斥候を勤るに依て也。道中の母衣串持せる体、殊の外目立ける故一とせ制禁に被仰付けり。其年佐左衛門江戸詰に當りて傍輩と参府せり。翌日に母衣串に母衣を飾り置ける。傍輩共見て、御制禁の母衣串を佐左衛門持せたるは謂なしと謔々中にも、悪口に鯨どじょうすくひにせんとて持せしものならんといふ。夫れより誰いふとなく佐左衛門鯨すくひと異名していひけるとなり。或時大河内左左衛門が明番を更取ける時佐左衛門賑る迎立しか、各は我を鯨すくひと異名せられし奇怪也。といひ出し一ツ・二ツ言募りしが、左左衛門言訳少し妻手になり、既に云違へらるべき体なりし時、丹羽五郎左衛門といふ相番、是は御番所へは出ざりしが、次に聞左左衛門我が相手になるぞと踊出、佐左衛門其方は新参者にて古番の者へ相談もなく、氣儘なる事をするのみならず過言也と遣り込る。母衣役の者衆に母衣を持せたるが僻言か、夫を何かとは武道に不心掛けなるものとたは言也と云。五郎左衛門が曰く、制禁と被仰付し上はたとへ持参する共出す事ならず。御制禁の上は若もの事あらば上の御了簡有るべし、我々にならひあるべき也。其上に武道へん手柄なき身として、侍の付合不心懸とは推参也と、刀に手を懸んとす。其外相番寄合して御殿と制して其儀はしつまりけり。其比いたつらものゝ狂歌に

大河内は頭一本（ハ）ちにて口廣く 味ひわるく尾をすぼめけり

其後何となく寄合へ役替して佐左衛門は紀州江皈りけり。其比朽木瀬左衛門といふ相番也、此ハ朽木兵部が弟也。瀬左衛門重病にかゝりし時、紀州卿に親類連も無之新参の獨身のもの故に、相番共看病せしが、終に瀬左衛門相果けり。依て朽木兵部より瀬左衛門相番のかたへ使札を以、始終世話となりたる事謝礼す。然るに此堀部佐左衛門奸佞巧のものなる故、何かと己が立身の種共心懸て居けるが、或時叡山根本中堂修理の節、奉行として朽木兵部叡山に居候事を聞済し。翌年江戸詰の節終に叡山一覽不仕候間、此度序に立寄度と願を支配迄申立登山す。全く一見の爲にあらず。兵部に近付にならんとの手術也。叡山にて兵部宿所江至り、相番使札の札を延べ進物を持参、面謁を遂げ彼是話の序に、我大阪御陣の節藤堂宮内手に付、八尾の地藏堂にて小返しを致し覺も有之候へば、何卒目立候御奉公仕度と咄す。兵部と旧知の如く語り連て、其後ひたすら音信を通して懇志にしけり。その比藤堂宮内城下伊賀の上野より和歌山へ來り、小間物を商ふ者に理左衛門といふものあり。佐左衛門渠に念比になし、紀州へ來る時は宿をして心安く手なつてゝり。此理左衛門は宮内方へ出入し咄伽をも致すものゆへ、ある時佐左衛門・理左衛門へたのみけるは、我等は昔大阪御陣の節には、宮内殿手に付て少しの稼も致して、當御家へ五百石にて被召出たれとも、はか／＼敷目立役にもならず、自分に取なしも難致今日迄過候也。貴様は宮内殿氣に入て居らるゝ事なれば、我等噂も取成有て何卒宮内殿より状を給はる様に働き玉はるべし。其文言は其許事以来中絶、何方へ被居候事も不存候処。紀伊殿へ被召出候由目出度事に候。大阪にてかせき有之候へば、何卒目に立候御役儀にもなり申さるゝ様にと、願申事に候と被下候はゞ年寄頭分の者も承り候はゞ、殊の外我等爲になり申事也。偏に貴様の働頼み候よし申けり。理左衛門日比懇に預り忝く思ふ折なしなれば、心安く領掌して伊賀へ皈り、右の趣を俱に宮中へ語りければ心得たりと挨拶ありけり。又夫れより前に朽木兵部にたやすく音信しけるゆへ、何卒我等儀を紀州役人共へ御挨拶なされ玉る様にと申送る故、兵部より江戸に居被申子息方へ申遣し、紀州御城付衆へなりとも登城之節、堀部佐左衛門儀大阪御陣之節八尾の地藏堂にて小返しの働きある仁にて候。何卒御取立有様にと年寄衆へも咄玉る様にと申されける故に、御城詰の者退出して其比江戸詰の家老三浦長門守江語りけるが、長州聞て少し斗りのかせぎ言立るものなれば、御家には左様の者斗升ではかる程あるべしとて少しも頓着せず打過けり。然るに小間物屋理左衛門紀州へ來る時、宮内よりの

書状を持参して佐左衛門へ届けり。佐左衛門不斜悦び自分として開封せず組頭の方へ右の書状持参し、宮内殿よりかような封状到来す。御国境の城主より書状の来り候を私に開き申べき様なし、依て持参仕候といふ。組頭これをきゝ念入候御届尤也。我等此状を被見もいかゞなり。我等此状を預置年寄衆へ申達すべしと預かり、佐左衛門販りて組頭ハ三浦長門守宅へ至り其段を申述る。長門守聞てしからは是へ佐左衛門を呼て開封致させ然るべしとて則佐左衛門をよび寄、長門守申聞るは宮内殿よりの状私に被見なき段念入候。是にて開封いたされよといふ。佐左衛門封を切りみづから状を半見て、扱もくかやうの状とは存せず御断申候。無益の事に御世話掛申たりと言ひて、くるく巻いて懷にせんとする時に、長門守それはいかやうの儀と問ふ。いや申上るに及ばずと答ふ。再三長門守尋ける故、私身上の事を申越候といふにぞ、其状を見たしとてひとり一覽して、是は手前へ預置ぞとて取納めし故佐左衛門は販りける。長門守同僚にかたり兵部殿、宮内殿より仰越るゝ上ハ実に場を踏みたるものなれば、組頭の明もあらば組をも預けて然るべしと内談ありけると也。

時に牧野兵庫頭は武辺の筋といへハ、咄しをも聞きたかり、武氣を好む人なれば堀部が大阪にての様子かんなしく思ひ、手前へ呼て詳に物語も聞たし。出入有之様にと再三申通するといへとも、堀部いかゝ思ひてか来らず。或時途中にて行逢しに依て兵庫申けるは、何として我等方へは参らぬそといひる時、佐左衛門申は其方へ参りても何も御願ひ申べき様も無之故、参り不申と何の會釈もなく申ける故、扱々慮外なるおこり者と甚立腹して別れけり。佐左衛門はいかに方便しても兵庫方へ取入度おもひけれ共、以前口論したる丹羽五郎左衛門・大河内左衛門は、兵庫が相口にて常々出入し親しみける程に、渠等に出會ふ事を厭ひて器量気なる挨拶しける物と後には諸人も察したり。兵庫販宿して右の兩人へ佐左衛門返答を語り、扱々にくき奴也と申ければ、兩人もよき幸といよく佐左衛門を云消す程に、兵庫にらみ居たりけり。或時田宮平兵衛方へ浦上新八・村上(一本郷)卿ハ、四・五輩夜振廻是あり。時に浦上殊の外遅く来りしに付、一座待兼居る処へ浦上来る。何とておそかりしと問ひければ、されハ是へ参りかけに、堀部佐左衛門へちよつと立寄りしに、八尾地藏堂の小返ししたる手柄はなしが、出聞きしても立かたく手間取延引仕りたりと語る。一座の者其武辺咄はいかやうの事にや咄されよ申す故、其小返しの働きを語りさためて首を取り申

されたらんと尋候へ共中々の事、首を取りたる所藤堂和泉守家来伊藤彦助といふもの来て、首をうばひ取
逃行候。御凱陳の後和泉守詮議有て奪取の科に依て彦助成敗、其弟伊藤吉助ハ兄の科によりて、改易にな
り候と咄し候と語る時に、一座に村上（一本に郷）ハ是を聞て浦上を咎めて、其咄一定一言も違ひはなきか重て
左様になきとはいはせぬそ、尤其方へかゝる事にてはなし。其彦助といひ吉助といふも我等か従弟也。兄
の彦助は平生身持不行跡にて有けるゆへ、其科にて切腹云付られたれ共、奪首して成敗にあひしにあらず。
吉助は何の不埒もなく能勤め其儘召仕れしかども、兄の切腹したるにおめく勤もならず、依而自分よ
り暇を願ひ浪人して、當時桑名の越中守殿へ勤め居候也。武士の奪首したる杯といはれて、其分には捨置
がたしと以の外腹立す。浦上聞て佐左衛門が咄につけても落しもせぬぞ。侍の冥利渠が物語は我等證人ぞ
といふ。又かたはらよりも佐左衛門の不届もの、證據なき手柄咄し彦助が死にたるを聞て、左様のことい
ふかなんども口々に口くちり、その座は興もさめておのく退散す。村上（一本郷）ハはそれより村上彦右衛門
宅へ至り、彦右衛門五千石にて番頭なり。右之彦助・吉助は彦右衛門爲には従弟也。仍而（一本郷）八来たり
てしかくの趣を語る。彦右衛門立腹し其儀は我等方より伊藤吉助江飛脚を立て、其由を可申遣とて、早
々申遣しけり。吉助是を聞て武士の上に左様の事いはれては捨置かたし、和泉守役人へ達し右の明を立申
度候。其間御暇被下候へと願ひ申すに依て、浪人して古主和泉守へ至り年寄役人へ達。何れそれより彦右
衛門方へ、其訳あかり立て遣され玉はり候へと願ふに、尤なる事なり彦助切腹・吉介浪人のわけ具に申遣
すべしとて、彦助儀は不埒ありて切腹申付、奪首の科と申事ハ跡方もなき事也。吉助は其儘勤申儀構ひな
しと申渡といへども、自分より暇を願ひ家を立去り候よし。和泉守役人より彦右衛門方へ書簡を出す、吉
助是を受取て又々飛脚を以て彦右衛門方へ遣しけり。よつて彦右衛門（一本郷）ハ申合せて御詮議被成下候様
にと申出たり。三浦長門守・加納五郎左衛門月番にてこれは亦大事也。御旗本より口入の佐左衛門事也。
且朽木兵部・藤堂宮内よりも兼而被申聞たる事もあれば、大事に及ばぬ様に吟味仕方もあるへき事と日数
を歴たり。時に牧野兵庫此儀を聞て兼て慮外ものにくしと思ふ矢先ではあり、急に村上彦右衛門方へ見舞
対面して、直に件の始終を聞、和泉守殿役人より遣したる状被見仕度といふ。彦右衛門それは御目に懸る
に不及といへ共、達て所望する故に取出して爲見けれハ披見して、我等預り申とて懷中して立返る。夫は

我等證據に仕る書狀にて、外へ出候物にあらずと取りかへさんとすれども、勢強き兵庫頭が取納し事なれハ、耳にも聞入らず立賑けるにぞ。彦右衛門も力なく打過けり。兵庫は立かへりて佐左衛門武辺の上に偽をいふ事大闇人、礫にもかけて武士の見こらしめにせんと腹立クワウ□りけり。其比台徳院の御遠忌にて、各々廟參勤番之節、兵庫に長門守五郎左衛門出會たり。兵庫兩人へ被申けるハ、彼武辺の偽りを云ひし大盗人め、詮議相濟申たらハ見懲しに礫にかける奴にて候と申しければ、加納五郎左衛門聞もあへず、武道の事片意地に不詮議家老を我等は礫にかけ申さんと、會釋もなく挨拶しける程に兵庫推參也。五郎左衛門と脇差に手をかけるを、有あふ人々は八日といひ場所といひ何事ぞと取靜めてけんくわにはならされ共、兵庫ますく怒り、強く是非に堀部を礫にかけて見せんといきどをり、直一本參(奏)に及ぶといへども武道之儀ハ随分吟味強き家なる故、明白の輕重を以て御僉議なさるゝ。賴宣卿なれば兎角具に御僉議可有思召にて御承引なし。是に依て兵庫深く憤り何國とも出奔せり。賴宣卿の命にて京・大坂・奈良・堺・近國の御領・私領へ人を入れて御尋ねあれども其在所知れず。其比吉見善太郎紀州家弓の天下一は此吉見善太郎といふ出頭人

器量才覺なる男なりけれハ、渠に了簡致し尋見よと御内々にて被仰付、喜太郎畏り夫婦連ふて京都江忍び上がり、妻を□□女すあいに拵へ小間物・繪・おしろい・古着切類をあきなわせて公家衆へ出入させ、諸色を安く賣らせけれハ、次第に近付も廣くなり攝家方其外にも重寶なるすあひなりとてよやりける。兵庫ハ堀川殿の聳なり堀川堀川此内に隠し置ゆへ知れ兼候ものならんと喜太郎推察せし故、右の通に拵へ堀川殿へ取入ひ

たと出入けれとも、中々左様の景色ハ聊かも外へハ見へさる體なり。或時老女かのすあひに語りけるハ、十六・七計の容義よく取廻しも相應の女奉公人あるまじきや。田舎より病氣保養の御客あり、其伽に致度かゝへ申事也。頼み申といふ心得候請合立歸り喜太郎に告る。喜太郎天のあたえと悦び、紀州の我姪の十六歳にて容儀もよかりしを急によび乃ぼせ、兵庫が容體・氣質・年の比・委細申含め奉公に出しける。何事によらず上への忠節なれハ、女ながらも能其旨をそんじ相背かず勤、右之通り之處見化し候。上ハ缺落すべしと道程も其前に見覺させ、扨公一本家ナシ(家)奉公に出したり。容儀心ばへ元より申含めたる事なれば、萬

事心を付ける處に早速召抱られ、彼兵庫が側へ仕へけるとなり、女側に居て考へ察するに一つとして喜太郎から詞に違はす。是に依て隠に相違なき段を告知らせける。然るに江戸松平伊豆守御老中なり。内意ありをる

ハ、御家士牧野兵庫頭長虎方より、頼宣卿には御隠謀のきざしはあるとの訴人ある事、兵庫頭より書通に及び、夫に付出奔致たる旨也。其實否詳ならず爲御心得申上候由、兵庫頭より右之趣伊豆守へ差越たる趣き。頼宣卿御驚有て御嫡子光貞卿へ御相談ありけれハ、御詮議に及ばる迄もなく召捕て、切腹被仰付の外有間敷との玉ふ。諸老臣詮議まちく也。光貞卿ハ何度も切腹と被仰、頼宣卿御意には宰相何と見ても慥なる心なりとのたまひけるや也。頼宣卿彼者を助け不置時は後の證人なければ、如何様にもすかして召返してこそ申譯もあれとて、伊豆守より内意の由ハ毛頭沙汰なしに可致由御意なり。扱兵庫頭へハ申上候處御承引なき段ハ御心得違なり、いかにも尤に思召候より、取來六千石其上御加増にて一万石被下置候間罷歸るへしと被仰遣。兵庫頭が曰く、難有思召にて御座候得共、堀部佐左衛門が首を見不申内は、罷歸り諸人に面を合せ難しと御挨拶申上けれハ、堀部切腹被仰付彼か願にまかせ、首をさしのぼせ一萬石の御墨附被下置、従者各其の軍役に行粧して紀州出立、右故牧野兵庫頭長虎堀川殿歸るとひとしく、洞の川といふ所へ押込められ、其後正雪儀に付兵庫悪心無實の段も、被仰開別儀無之候。大略實説紀州古老の物語を記す。

一、南陽語叢に云く

牧野兵庫頭は熊野御途中にて破れたるわんほうを藤かつらにて纏ひ、路傍に蹲踞せしを顔かまへ眼目の光只者に有ずと、御覽しとかめられ、直ちに御召連に被成委細御尋ありしに、果たして牧野金彌か忤に相違なければ、御満悦被遊毎々器量之程御稱美ふかく、遂に諸大夫に迄御取立被成候得共、由井正雪一件に御疑かゝり、無邊御仕置被仰付世に委細を記せし物あれば爰に録せず、治世の姦雄亂世の豪傑ともいふべき者乎。評定所倉庫に關所附立の帳面あり武器は甚寥々たり。

(以上 南紀徳川史第五冊)

十七、牧野兵庫頭流罪

十一月配牧野兵庫頭長虎於田辺以其有隱謀也

慶安三年牧野兵庫頭流罪被仰付候ころ兵庫頭え、加擔致候面々拾四人衆の中にて得井太郎右衛門・同十三郎・同十郎兵衛三人は切腹被仰付、其餘は皆々御暇被下候。二代目村上彦右衛門・同舎弟亦八も御暇に相成候。其時渥美源五郎・曾根孫太夫を御前に召され、其方共は村上か合壁に罷在候事、萬一色立候様相見得候はゞ踏込打散し可申候也。心得罷越候様にと被仰聞候よし。扱其日未明に曾根・渥美の兩人同時に合せ、尤兩組足輕共玉込の鉄炮に切火繩かける爲持たるとなり。曾根氏・渥美氏を見かけるといなや馬を乗向け、いかに源五郎太平の世に生れ、血嗅き事に不逢退屈したるに是幸の事也。いさ押かけて踏潰さばやと云。渥美氏成程尤なれ共色立品なれはとこそ御意なれ。御下知有ん事我等は不同心といふ。曾根氏いふ、それはそふたか押かけたがよかるふと、存也とてたきられられ共渥美氏は少し待れよとて鎮らる。曾根氏不祥顔にて被扣たる内に、村上穩便に引ひたるゆへ何事もなかりしとぞ。かくて後年渥美氏申されけるは、その節に自分も孫太夫が通り心付たるに、彼男に不圖詞の先を取れたる無念さに、御意を引掛て留たれば、元来律儀に堅き男なれば、その分に止め先を取れたる事を思出せば無念なりと、亦忘ては後悔をせられけるとぞ。

（牧野異考） 事は牧野兵庫・村上彦右衛門伝に詳なり。彦右衛門子八十郎（後彦右衛門）無足。御小姓勤之处亦父之事に座し、承應元年辰年御暇被命、明暦二申年歸參後知行千石を賜りたり。

一、頼宣卿は百姓・町人・出家・山伏にも内々にて懇意を被成置、其輩国々にありしかば、珍事をば必早く御聞有。正雪隠謀の儀御判を謀書候事も、駿州孤崎辺の眞言坊主に御懇の者有之候而。七日前に吉見喜左衛門方へ参り渡辺若狹守直綱に注進しれる故、前方に御聞被成けるナリ。一國の大將は國々にかやふの者を拵置給ふべき事なり。（以上言行録）

十八、改印

慶安五年壬辰 承應元

公五十一歳

二月十七日改作印章、以正雪詐謀之故也。

(南紀徳川史第一冊一九四頁)

この外由井正雪に関する頼宣との記事、南紀徳川史第一冊一八七頁・一九〇頁にかけ多し。

十九、剛勢開門扇

牧野兵庫流罪の時、迎と号して高田喜八郎・竹本茂兵衛・的場源四郎・同九右衛門、中途へ出向て休息のためとて、謀て山口御殿へ入たり。喜八郎・茂兵衛・源四郎は兵庫駕の両脇に引添ふて御庭へ駕を□[？]入る。九右衛門は警固のため御御門に残ぬ。兵庫駕御縁の際へ至る時、兼て云合せなれば喜八郎は御縁へ飛上り、書付を出して御意なりと詞をかくれば、兵庫駕の内ながら平伏す。日高郡李村へ流刑候仰付旨高らかに云渡す。其時兵庫御情なき御事に候と云ながら脇指をぬかんとするを、茂兵衛透さず襦袢^{コジリ}をかへし、則ち首をもき取たり。扨御門前に相居たる兵庫家来共、主人の安否無心許存噪動する事甚敷。己に御門内へ押入らんとする故、番の足輕御門の扉を打たり。九右衛門是を見て何故御門を打やと問へば、足輕共答て御覧のことく兵庫殿家来可推入躰故、狼藉仕ん事を存て御門を打たりといふ。九右衛門聞となんぞ御門を可打早く開くへしと下知するゆへ足輕共則開けハ、兵庫家来共は敷居際迄詰居て押入るへき躰也。九右衛門之見て大に怒大の眼を□^{みづめ}て、礮^{はつた}と白眼、兵庫事罪有によつて今日流罪被仰付候所也。其家来の分際として御門内へ入んとするは上を不憚仕方不届千万也。一寸にても御門内へ足を踏入ば一々撫切にせんと、刀の柄に手を懸てつつ立たる分飾は、金剛力士もかくやと思計也。兵庫家来某其勢に辟易して引退ぬ。若此

時九右衛門あらずんば忽狼藉に及べきに。一言の下に大勢を追退くは剛勇の致所也。

一説に竹本兵衛ハ柔術を關口柔心に受テ達者ナリ。此口宅ヨリ広瀬大橋迄出タル所老父休悦跡ヲ追。徒足テ手ニ臙當一足相携テ呼力ヘセル故、何事ヤ覽ト馬ヨリ飛下リレハ、其方柔ニテ兵庫ヲ組留候半ナレ共、兵庫モ田宮流ノ居合ノ上手ナリ。投ラレサマニ横ニ払フ事アルヘシ、臙當致候ヘトテ相渡シ候故、茂兵衛押戴キ則着用致シ罷越候由。山口ニテ兵庫駕ヨリ出タル所ヲ組テ投タレバ、如案コケナカラ脇指ヲ抜キ横ニ払フ、茂兵衛力足ニ當リ臙當ノ骨一・二本切り折りタリ、於是休悦ガ考其功有。此説関口家ニ云伝ヘリ、前段トハ相違セリ。何レ力ナル事ヲ不知。

一説ニ後年兵庫次男藤丸番人奎兵衛ガ慮外ニ憎ミ圍ヲ破テ、奎兵衛ヲ殺シテ出奔セリ。則召捕切腹被仰付タリ。檢死ハ小笠原庄大夫也。此藤丸ハ大男ニシテ無双ノ大力也。常ニ番人ニ向テ汝等盡シニ守衛スル事無用也。吾此困ヲ破ル事イト安シ、其手並ヲ見セントテ格子ニ手ヲ懸震ルニ、響渡テ角物ノ格子ユカミタハムユヘ、番人トモ大ニ驚色々宵テ靜タリ。藤丸笑テ上ノ御咎ヲ受タル身ナレハ何國ヘ力行ヘキ、汝等氣遣ヘカラスト言タル由。件ノ奎兵衛ヲ殺シタルモ、格子ノ内ヘ手ヲ入タルヲ捕ヘテ、其手ヲ引ヌキ飛出テ切殺セリ。其比ハ藤丸ヲ鬼神ノ如ク沙汰スルユヘ、切腹ノ場ヘ立合役人・下人等マテ何茂覺悟シテ出タリ。三方ニ切先一寸許殘シテ罐世縛ニテ卷タル脇指ヲ載テ出、之ニ持タル者震テガタ／＼ト鳴タル由。介錯人ニハ藤丸刃ヲ取ント時、臥トキ切ヘシト兼テ言含メタリ。其コトクニ切ントスル刃ノ光ヲ藤丸見テ末早シト怒テ振力ヘリ白眼付タル顔色ニ恐レテ力ノ者震ヒ出ス故、満座ノ役人甚氣遣タル力存ノ外立派ニ介錯シテ首打落タル由。藤丸四歳ノトキ圍ヘ入リタル由。切腹ノ比ハ廿歳計ト云。切腹ノ節役人ヘノ礼儀挨拶少モワビレズ威有テ、其様躰幼少ヨリ山中ニ籠居シトハ思ハレス。惜キ事ナリト人々評シタリトゾ。又藤丸兄辰之進ハ小男ニテ面躰長ク、物靜ニシテ孝文ヲ好ミ、殷勤ニシテ能人品ナリシカモ長命ニテ七十餘歳ニテ死タリトゾ。初ハ番人モ少ク漸ク一兩人付居タルカ。藤丸ガ一事ヨリ番人増テ、出合足輕代ル代ル行タリ。若林小左衛門ト云ヘル者モ番ニ毎度行タリシトテ、予ガ幼少ノ比辰之進ガ事ヲ語り聞セタリ。

一説ニ的場九左衛門始ハ十人組勤タリ。南龍院様御登城ノトキ御途中ニテ義直卿ニ御遇被遊、御人拂ニテ御密談良久シ、此時九左衛門御供ナリシガ、皆々扣居タル中ヲ推分出テ御側近クヘ參ル故、退候ヘト御意アレトモ兩耳ヘ指ヲ入テ御密談済迄罷有ル。跡ニテ皆人事ヲ致由申ケレバ尾張様兄トテ油断ガナラヌト答タル由。上ヨリハ何ノ事モ被出年久敷十人組ヲ勤ル後、御使役ヲ被仰付タル節。其方事は迄御取立可被遊ト思召候ヘトモ指出候生得故、御延引被成タル旨被仰渡ケルカ。カノ密談ノ事ヲ思召ナランカト世人評セリ。

又其比ハ和歌山ニテ御供ニ出ル面々毎朝四比ニ罷出、何モ出揃候時御出無之節ハ罷飯候ヘト被仰出。又晝比ニ罷飯候ヘ

ト被仰出、其後タ七ツ比二同様ニ被仰出ケルニ、皆々腰兵糧ニテ晝ノ御返迄詰テ飯ル人多シ。タノ御飯迄残ルハ少シ。九左衛門ハ毎連モタノ御返迄詰居ケルトゾ。

(以上 牧笛類書第一卷)

二十、中津村の兵庫遺蹟

清水 生

本川谷は三佐と老星の間にかなり大きい。「紀伊続風土記」三佐村の条に、「……村の南三町谷にあるを小名本川といふ」とある、それである。林道が拓けているが車の通行は危険と聞き、一行は谷の口に車をとめて清らかな溪流沿ひに歩む。

慶安三年十一月(一六五〇)當時紀藩の執政として六千石を食み、南龍公の寵を集めた兵庫頭牧野長虎が、俄に罪を獲て李村に幽閉され、これに連坐して長男新藏・次男伝藏が配流されたと云う地だけあって、僅かに一方に開けた谷の入口は狭いが、奥地にはかなりの田畑がある。洵に人を監禁するには屈強の地と云へる。

谷に入って二・三町小さな土橋を渡ると二畝ばかりの麥田がある。「この田を今も別當屋敷とよび」、新藏・伝藏を監視するため、藩から派遣された次郎別當の屋敷跡と云ふ。またこの近くに「出侍」の地名もあり、「これは藩庁の役人の巡視を此処で待受けたとも云ふ」と井原教育長は一つ一つの里伝を説明してくれる。……中略……谷は中程から東谷と西谷に岐れ、私達は東谷へ曲る。片方は山で片側は狭い乍らも麥畑がつづく。山の緑がいよく深い。処々に眞赤なツツジが燃え、藤蔓が薄紫の花をつけている。塵埃と騒音が全く絶え、頭がジーンとなる程閑静である。「伝藏の屋敷がこの辺にあったという。その上が新藏の屋敷跡」井原義男氏の説明がつづく。屋敷跡は今柿畑となって、當時を偲ぶものは何も遺っていない。「明治三十年頃までこの谷に数戸の家があった。また新藏の後裔と名乗る家が今も三佐にあり、

刀劔等も伝来している」。兵庫の後裔の一族と伝える。船津中孝の湯峯先生がこの頃から参加されて補説してくれる。私達は三百五十年の昔父の罪の犠牲となり、この山里にあたら生涯を埋めた牧野兄弟の身を回想し、暫く暗然たる思に耽った。思い出した様に老鷲が山のしづまを破って啼く。

正午過三佐安樂寺へ着いた。村を一望する小高い山裾にあって寺の構えも美しい。今まで経て来た佐井の極樂寺も坂野川の山向寺も、その本堂は普通の民家と同じ構えで、平地部の寺院建築を見慣れた目には一寸異様に映ったが、安樂寺は寄棟造り乍ら堂々としている。この寺も靜土宗鎮西派九品寺末であるが、その由緒は明かでない。寺伝によると宝暦二年（一七五一）火災にあい、同年四月八日本堂再建、當時藁葺きであつたのを、明治十一年瓦葺に改めた。現代の本堂がそれである。また庫裡も宝暦四年の建築にかゝる。……中畧……牧野兵庫頭長虎の一族が寄進した双盤大小二ヶはこの寺に伝はる。その一ヶの録に次の文字が印刻されている。

松壽院清巖固白居士遊修

施主 牧野直能

紀州日高郡御座村 安樂寺 愍譽代

正徳三癸巳五月十八日

これで見ると施主牧野直能と松壽院固白清巖居士は同一人で、直能が生前の正徳三年五月に自己の菩提を修し、この双盤を寄進したものと思はれる。然らば松壽院固白院清巖居士の牧野直能とは何者であろうか。これを知るべき確実な資料は、宝暦二年の火災で失われたか寺には何も見當らぬ。だが此処で私の想像が許されるならば、直能こそはまさしく本川谷に幽閉された、兵庫頭の長男新藏その人ではないかと思はれる。何故なれば二男伝藏は里伝によると監視中の某夜、ひそかに役人の目をくらまして此処を逃達したと云われる。慶安三年十一月（一六五〇）新藏兄弟が本川谷に流された際、二人は何歳であつたか明らかでないが、長虎には新藏・伝藏の外、まだ王丸・藤丸・千代丸（この三人は美山村李に流さる）があり、藤丸はこの時三才ぐらいであつたらしいと云われる。これから推測すると長男新藏が本川谷へ来たのは、十才前後を多く出でなかつたであろう。さればこの双盤を寄進した正徳三年（一七一三）には、恐らく新藏

の年令は七十歳前後であつたであろう。依つて新藏はも早自己の余命の長からぬを思い、不幸なりし生涯を回想して生存中に、自己の死後の冥福をいのつたのではあるまいか。
またもう一つの双盤には

清譽淨念信士 施主 竹野甚兵衛

宝曆六丙子（一七五六）三月 竹譽代

江戸西村和泉守 作

の銘があつた。淨念信士と竹野甚兵衛は如何なる人物かについても知るべき資料を缺くが、土地に聞いた話に、今も三佐の地に甚兵衛屋敷と云うのがのこり、何でも三佐村の大分限者であつたと云うことである。或は淨念信士は新藏の弟伝藏であり、新藏・伝藏の二人はこの竹野甚兵衛からひそかに庇護を得ていたのかも知れぬ。そうするとさきの伝藏がこの地から逃走したと云う裡伝と合はなくなるが、これ程嚴重な監視の目をくらまして逃走することは一寸信じ難く、假例逃げたにしても発見されずにはすむまい。これはやはり伝藏に対する同情的な伝説ではないかと思う。

——昭和三十四年五月十五日——「紀州新聞」連載分を小補す

あとがき

父が牧野兵庫頭に関する史資料を集めたもので、活字化されていないと思ってワープロ化を始めたが、一部は既に「南紀徳川史」に載っており、また平成に出版された「美山村史」・「中津村史」・「美山の歴史」などにも載っているが、限られた文献を引用して内容は近いのことが多い。

昭和八・九年に當時の川上村李の王丸谷を調査され、「牧野兵庫父子の哀史」と「慶安異変の謎」を大阪毎日新聞に連載された、毎日新聞記者西瀬英一氏は川辺町猪内川出身と聞く。

此の書は昭和三十四年の草稿であるから「美山村史」・「中津村史」の出版約三十年前の資（史）料集である。どこからか未発見の資料でも出たら、牧野兵庫頭事件の真相が解明出来るのに、今後の学究をまちたい。

平成十八（二〇〇六）年五月一日

清水 章 博